

伝学的背景の詳細は不明であるが、4q35領域の欠失の大きさはFSHDの臨床的重症度及び多様性に影響を与えている可能性が示唆された。

PA-23.

舌に発生した神経鞘腫の1例

(口腔外科学)

○小野 貴庸, 金子 忠良, 松田 憲一,
遠藤 理子, 高橋 英俊, 千葉 博茂

神経鞘腫は Schwann 細胞に由来する良性腫瘍で、四肢と頭頸部の皮下に好発する。顎口腔領域の発生頻度は全神経鞘腫の約 4% と報告され、なかでも舌が好発部位である。またこれらの発生母地は、脊髄 50%、聴神経 (小脳橋角部) 30%、その他の末梢神経 20% といわれている。

今回われわれは舌に発生した神経鞘腫の1例を経験したので、その概要を報告する。

患者は 16 歳の男性で、主訴は舌尖部の腫瘍である。既往歴、家族歴に特記事項はみられない。現病歴は 8 歳頃より舌尖部に腫瘍を自覚していたが、自発痛や増大傾向がみられなかったため放置していた。学校検診で舌腫瘍を指摘され精査を勧められたため、総合病院歯科を受診し、そこより当科を紹介され、平成 13 年 8 月 24 日来院した。

初診時、口腔内は舌尖から左舌側縁にかけて大きさ 10×14 mm の弾性硬、半球状の境界明瞭な腫瘍が認められた。その部の舌粘膜表面は滑沢で正常粘膜色を呈しており、その一部に腫瘍との癒着が認められた。舌の知覚ならびに運動障害はみられなかった。

MR 像では、腫瘍は T1 強調像で中信号、T2 強調像で高信号を呈し、ガドリニウム造影により、境界明瞭で均一に増強されていた。

以上の所見より、舌腫瘍と臨床診断し、平成 13 年 12 月 19 日、全身麻酔下にて腫瘍切除術を施行した。腫瘍は被膜に包まれ、周囲組織との境界は明瞭で比較的容易に剝離可能であった。粘膜との癒着部は粘膜とともに切除した。切除物は大きさが 10×10×14 mm で、赤褐色の被膜に包まれた充実性腫瘍であった (腫瘍は薄い線維性結合織で被われていた)。病理組織学的検査では、Antoni A type の部分が大半を占めていたが、一部には Antoni B type の部分も認められた。病理組

織学的診断は神経鞘腫であった。

現在まで、術後 5 か月を経過しているが、再発はみられない。

PA-24.

当科における片側顔面痙攣に対する A 型ボツリヌス毒素療法の検討

(内科学第三)

○丸谷 宏, 内海 裕也, 南里 和紀,
関根 成郎, 春川 肇, 松村 敦,
賀来 宏維, 桜井 淳, 長谷川 明,
林 徹

当科における片側性顔面痙攣に対する A 型ボツリヌス毒素療法を行った症例について検討した。

【対象】2001 年 1 月より 2002 年 3 月の間に上部および下部顔面筋のいずれにも攣縮を認める片側顔面痙攣患者 16 例 (男性 6 例 女性 10 例)。平均年齢は 58 歳、平均罹病期間は 6.4 年であった。期間中再投与 14 例 (2 回 7 例, 3 回 3 例, 4 回 1 例, 5 回 3 例) あり、延べ施行回数は 44 回であった。なお投与間隔は 8 週以上あけることを原則とし、患者側の自覚症状による希望にて決定した。

【方法】ボトックス注 100 (A 型ボツリヌス毒素) を生理食塩水で希釈し、0.01 ml が 1 単位と調節した。重症度の違いによる治療効果を明らかにするため、上顔面筋において常時痙攣の認められる重症群 A 群 (5 例) と軽度～中等度の痙攣の認められる B 群 (11 例) に分類した。初回投与量は全例において患側眼瞼部眼輪筋 5ヶ所に 2.5 単位ずつ筋肉内注射とした。治療効果は治療 2 週間後に判定し、また 4 週間後の改善度と満足度アンケート (0～100 点) を調査した。2 回目投与からは症状に応じて単位数の増減を行い同様に治療効果の判定を行った。

【結果】初回治療後効果：A 群での改善度は改善 2 例、やや改善 2 例、不変 1 例であり、満足度アンケートでは平均 54 点であった。B 群では著明改善 7 例、改善 4 例であり、満足度アンケートは平均 88 点であった。初回治療の効果持続期間は A 群 8.8 週、B 群 12.5 週であった。調査期間内最終治療時効果判定：A 群での改善度は著明改善 1 例、改善 4 例であり、満足度アンケートでは平均 82.5 点であった。B 群では著明改善